

モニターレポート（3月報告）

【報告内容①】

暖かくなってきており、雪捨て場の雪はなくなってきました。水分を含んでいるために土がやわらかい状態になっており、歩くのは難しかったです。その対策のためか一定区間に土の山土なのかと思いました。

阿賀野川公園の野球場の川沿いの道が所々、陥没している所が多数ありました。

細山、江口付近の土手では、ふきのとうを採っている方がいました。

蔵岡地区の対策工事はほぼ終了状態と思われました。

【事務所からのコメント】

雪捨て場の件ですが、排雪の融水により地盤が緩んでいることもあるかと思いますが、使用後は、使用前の状態に戻すこととなっております。公園となっていることも多く、ゴミなどの撤去にあわせ、占用者で対応し、阿賀野川河川事務所では検査を行う予定としております。

また、阿賀野川公園の野球場の川側の砂利となっている通路につきましては、河川管理用通路であります。一般の方の使用も多いことから、今後補修を予定しております。

小杉(蔵岡)地区の対策工事については、今年度分の工事は完了しました。

阿賀野川の下流域の左岸では、対策の必要がある区間の中でも最重要の区間となっていることから、引き続き対策工事を行っていきます。

【報告内容②】

春の足音が聞こえてきそうなこの頃です。

この冬は風が強い日が多く川岸の葦の穂が倒れて葦の間に流れ着いた流木やゴミが目につきます。

不法投棄のごみ等はあまり目につきませんが、阿賀野川No.22付近にホースリールが投棄されていました。これから引越しシーズンに入りますので、監視の強化が必要だと思われま

【事務所からのコメント】

報告のありました流木やゴミの件についてですが、高水敷の草などが繁茂していないこの時期は、特に河岸がよく見えることもあり目につきます。河川巡視でも水制などにある特に規模が大きいものについては報告があり、対応をしているところです。

また、不法投棄については、例年この時期は特に多くなることから重点的に巡視を実施しておりますが、巡視を行う日には、必ずといっていいほど、新たな不法投棄が発見されます。頻発する場所には、看板の追加設置を現在計画しております。

ご存じかもしれませんが、平成27年4月には、悪質な不法投棄があり、警察へ対応を依頼した結果、平成28年4月に容疑者が逮捕されたということもありました。

今後も悪質な不法投棄には、同様な対応を行っていきたいと考えております。

モニターレポート（3月報告）

【報告内容③】

距離標272付近から降りて川沿いの農道と河原を下流に向かいました。

途中行き止まり場所でUターンをして農道に戻りましたが、特に河原部分には投棄ゴミが多く、こんなものまでと思われる品まで有りました。

燃やした長椅子、400ℓの灯油タンク、古いテレビ、カセットデッキ、電子レンジ、タイヤなど、また、建築現場で使う木製の柄のついた道具、宴会跡の食材残など、よくこれだけ平気で捨てていくものだと思います。

今回は不法投棄物の多さに驚きましたが、自転車と一部徒歩での巡回では小さなごみしか回収できず残念でした。公衆道徳の欠如、ルールを平気で破る者の多さと痛感しました。

【事務所からのコメント】

ゴミについては、持ち主がわかれば不法投棄として警察にも届けられるのですが、写真を見たところ持ち主の手がかりはなさそうですので、確認の上処理したいと思います。これだけゴミが多いと河川敷をゴミ捨て場と思っているとしか思えません、困ったものですが、様々な活動を通して地道に河川愛護の啓発を行って行きたいと思いをします。

【報告内容④】

2月25日に新潟市秋葉区文化会館で、阿賀野川に関するパネル展示がありました。その中の1つに阿賀野川流域でかつて栄えていた近代産業遺産として【持倉銅山】がありました。持倉銅山は阿賀野川左岸の五十島集落を流れる五十母(いそも)川の約8km上流に所存し、江戸期に会津藩主が奉公を派遣して約100年ほど採鉱したのが始まりと言われています。その後、明治35年に新発田の寺田助松氏が蛍石を採掘中に銅鉱床を発見したのをきっかけにして、五泉の実業家である小出淳太氏が製錬所を建設して銅山の経営が始まったそうです。ここで取れた“荒銅”が五十島の川港から帆掛け舟(コーレンボウ)に積み込まれて、阿賀野川を下って財閥系の鉱産工場や商社に搬出され、重要な運送経路として使われました。明治・大正・昭和そして現在にいたる阿賀野川流域の町の発展に対して、いかに阿賀野川が重要な役割を担ったのかがわかるような展示でした。

【事務所からのコメント】

阿賀野川左岸にある阿賀町五十島(旧三川村)集落を流れる支川五十母川の約8km上流にある「持倉銅山」について詳しく触れられていました。史跡・旧跡に疎いものですから、ネットで調べて見ますと、江戸時代に発見され、明治期に銅の産出で栄え、大正期に鉱脈の枯渇や不景気の影響で閉山となったことがわかりました。現在も事務所跡や精錬所跡が残り、テレビ放映もされたことから注目されているようです。また、採掘された荒銅が五十島の川港から帆掛け舟に積み込まれ、阿賀野川を下って鉱産工場や商社に搬出されていたと言うことでした。舟「コーレンボウ」は全国でも信濃川と阿賀野川にしか存在しない独自の大型貨物船で、明治期に登場して、最盛期には300艘近い「コーレンボウ」が勇壮な帆を張って阿賀野川、信濃川を往来していたそうです。現在では満願寺閘門を通過して阿賀野川⇄小阿賀野川⇄信濃川と往来する舟も年1~2艘となり当然ながら「コーレンボウ」の姿も見られなくなりました。「コーレンボウ」から阿賀野川の舟運についての歴史の一端に触れられた思いがしました。